

花の草

福永武彦



はな の くさ
花 の 草



定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草 115 A

昭和三十一年三月十日 発行
昭和四十二年十二月十日 十八刷改版
昭和五十二年七月三十日 三十七刷

著 者 福 永 武 彦
ふくなが たけひこ

発 行 者 佐 藤 亮 一
さとう へいいち

発 行 所 株式 新 潮 社
しんちょうしゃ

郵便 番号 一六二
東京 都 新宿 区 矢来 町 七 一
電話 業務部 (〇三) (二六六) 五一
編集部 (〇三) (二六六) 五四二
振替 東京 四 一 〇 八 八 番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

草 の 花

福 永 武 彦 著



新 潮 社 版

937

目次

冬.....	七
第一の手帳.....	四九
第二の手帳.....	一五二
春.....	二四二

解説 本多顕彰

草
の
花

人はみな草のごとく、その
光栄はみな草の花の如し。

ペテロ前書、第一章、二四

冬

私はその百日紅さくすべりの木に憑つかれていた。それは寿康館と呼ばれている広い講堂の背後にある庭の中に、ひとつだけ、ぽつんと立っていた。寿康館では、月に一回くらい、サナトリウムの患者達を慰問するために映画会が開かれた。しかし私は、まだ病状がすっかり恢復かいふしていたわけではなかったから、そこに映画を見に行つたことはない。ただ風のあまりない、日射ひざしの暖かな冬の日、庭の中をぶらぶらと歩いただけだ。泉水があつて、その廻りに山吹や椿や楓かえでの木がある。寿康館の裏側の窓の前に、鶯ももの木が、緑色の葉群はむれを真丸く茂らせたまま、ドアニエ・ルソーの絵みたい、二、三本並んで立っている。向う側には枯れ枯れと連なっている梅林。庭の真中に小さな東屋あずまや、そしてその側に百日紅の木が一本、ぽつんと立っている。

それは気味悪く枝々を宙にさらけ出していた。裸の、死んだような、すべすべした枝。私はその側まで魅せられたように近づくと、どうしてもそれを撫なでてみないわけには行かなかつた。それはまったくすべすべして、赤ん坊の肌のようなだった。それでいて、厭いやらしいように年を取っていた。夏になると、この枝々に幾つもの小さな葉が茂り、そこに百日の間紅い花が簇むらり咲くなどと、一体どうしたら信じられるか。枝は無意味に、曲りくねつた百の手を天に差出している。それは他の一切のものと、何の関係もなく立っていた。

私は既に此処ここで、——東京郊外K村のこのサナトリウムで、——冬を二回越した。最初の冬に、

胸廓成形の手術を受け、予後が好ましくなかったから、やっとこの秋くらいから散歩の出来る身体になったばかりだ。従って私は、夏、寿康館の裏手の庭に来たことがない。従って夏、この百日紅に葉が生れ、花が咲いているのを見たことはない。私の知っている限り、木はいつも孤独に、裸のまま、くねくねと枝をひろげて佇^{たたず}んでいた。(これは今からもう五年ほど前のことだ。後に私は、夏になって、木がちゃんと花をつけ、盛装して立っているのを見た。しかし、そんな百日紅には、もはや、何の感動もなかった。)

私は汐見^{しおみ}茂思^{しげし}と、二人で、そこへ行ったこともある。私は丹前を着て、懐^{ふところ}手をしていた。汐見は白い病衣の上にオーヴァを着込み、ポケットに両手を突込んでいた。私は例によって百日紅の枝を撫でた。枝は空気よりも一層冷たく、生の本質のようにくねっていた。

「自然というものは怖ろしいね、こうやって生きているんだからね、」と私は言った。

「これは百日紅かい？」と彼は訊^きいた。

「そうだよ、知らないのかい？　これでちゃんと春になると芽が吹くんだ、夏になると花が咲くんだ。何だか不思議な気がする。」

汐見は手術前の身体だったから、私が月並なことを言ったのも、多少彼に景気をつけてやる意味があったかもしれない。また夏が来るかどうか、実は私自身にも半信半疑だった。よくなることを願うのは、誰しも自然の情だ。が、不幸な経験を幾度も重ねた病人は、癒^{なお}るか癒らないかが人力の及びがたいところで行われていることを、決して忘れてはいないのだ。夏は、もう決して来ないかもしれない。

「馬鹿げている、」と彼は言った。「こんな惨めな恰好をして、それで生きていたって何になるものか、死んでの方がよっぽどまだ。こいつめ、死んだ真似なんかしやがって。」

汐見は足を上げて、履いている下駄の裏でこつんと木の幹を叩いた。それから、ふと勢が抜けたように、「行こう、」と言った。

私は霊安室の横手にある裏門にも憑かれていた。病院の構内を一周して散歩道がある。この季節には、生い茂っていた夏草も枯れ、散歩道を縁取った櫓や栗や櫟の木々も落葉する。そうすると散歩道からは病棟の部屋部屋が見え、病棟で寝たきりの患者の眼にも、枯れ落ちた雑木林の向うに、外気小舎のトントンの屋根が幾つも点在するのが眺められた。

霊安室は、この散歩道からもう病棟が見えなくなった辺りに、木立の中にはずれて、一棟、寒寒と建っていた。いつもは錠前の掛った入口を明けると、土間の向うに祭壇のある八畳間、その隣が六畳の控室、そして裏に、厚い壁に仕切られて、解剖室が附いていた。その建物は運命の悪意のように、いつも人待気に建っていた。

冬の朝、病室の窓に凭れて外を見ていると、看護婦が二人、係の爺さんと共に、担架を下げて屍を運んで行くのが見えた。凍りついた雲が灰色の層をなして低く垂れ、インクのしみのような太陽が僅ばかりの薄明を地上に投げている時に、屍の上に掛けた白い布の上にも、霜は寒く下りた。黙々とあとから随いて行く一人か二人の遺族、——そして行列は霊安室の方向へ、ゆっくりと進んで行った。

私達は窓に凭れて見ていた。ぴりぴりする空気を透して、担架を運ぶ看護婦たちの話声が、意

味は分らぬながら、鮮かに聞えて来る。時々は明るい笑声までが。一体何を笑うことがあるだろう。何の屈託もないように、のびのびと、自由に。

「けしからんね、」と私は言った。

「要するに事務なんだよ、routine ^{ルーチン} なんだよ、」と角さんが言った。角さんは機械屋だった。独学で英語の専門書などを読んでいたから、時々英語を使った。

「いくらなんでも場合が場合じゃないか、何を運んでいるつもりなんだろう。」

「あの前に行く看護婦は田中だ、」と角さんが言った。田中というのは美人の評判の高い看護婦だった。患者の前ではいつもつんと澄ましていたが、女どうしではよく笑った。看護室の前の廊下を通ると、時々、中から彼女の笑声が聞えて来た。

「あの澄まし屋の奴、」と私は言った。「僕は不真面目な女は嫌いだ。」

声も、行列も、次第に遠ざかった。その時、汐見が誰にともなく言った。

「不真面目なんじゃないな、ただ若いというだけなんだ。」

私は振り向いた。汐見はベッドの上に胡坐 ^{あぐら} をかいて、煙草を吹かしていた。

「あの看護婦たちは生きているんだ、」と彼は続けた。「人が死のうと死ぬまいと何の関係もないんだ。死んだ奴は死んだ奴だ。彼女達は生きている、笑いもすれば泣きもする、それだけだよ。死んだ奴とはおよそ縁のない世界に、生きているんだ。君のような詩人なら、さしずめ、死の灯影 ^{ひかりかげ} の廻りを飛び交 ^か う蛾 ^が の如 ^{ごと} し、とでも言うところさ。」

私は答をためらった。その間に行列はまったく見えなくなった。その晩のお通夜に、霊安室に

安置された棺の前で、私は澄まし屋の田中が涙を拭うのを見た。

その年の冬は、死ぬ患者が多かった。もう五年の昔になる。それはストレプトマイシンがそろそろ出廻り出した頃で、しかし、値段はまだ高く、誰でもがそれを使えるとは限らなかった。成形手術は普及したが、肺葉摘出手術はその緒に就いたばかりだった。冬は厳しく、死者は多かった。私達はしばしば屍の通るのを見た。

しかし散歩道を迴つて霊安室の前まで行くと、その建物は雑木林の中に森閑と蹲つて、裏門はぴたりと鎖されたままだった。私はいつも、半ば無意識に、角材を組み合せた粗末な木の門を、両手で押してみた。それは微かに軋ったが開きはしなかった。切られ、皮を剥がれた木材は、縦横にしっかりと打ちつけられたまま、私の行手を塞いでいた。その門が開くのは、霊柩車がはいって来る時と出て行く時、つまり私達が出棺見送りと称して、霊安室の前に整列する時に限られていた。正門から出て行くか裏門から出て行くか、——このサナトリウムに病を養う七百人の患者にとって、出て行く道は常にこの二つしかなかった。多くの者は正門から出た、そして幾人かは裏門から出た。私は鎖された裏門に手を掛ける度に、暗い憤りを禁じ得なかった。私は嘗て汐見茂思とそこに行ったことはないが、もし彼と一緒にいたら、私よりも何層倍か力を入れて、この門を、——謂わば運命の門を、憤ろしく押したに違いないと思う。彼もまた、私が百日紅の木や霊安室の裏門に憑かれていたように、一つの觀念に憑かれていた。ただ違ふのは、私達サナトリウムの患者は皆、自分の死という觀念に憑かれ、彼は他人の死という觀念に憑かれていたことだ。しかし私は、そのことをあまりにも遅く知った。

**

しかし、私は自分について語るためにこの稿を起したのではない。汐見茂思、——ただこの人物を紹介しようと思うばかりだ。

私はサオトリウムの一病室に、彼と隣合つて、一年足らずの月日を過した。病室は大部屋と呼ばれて六つのベッドがあり、病状の好転した者は外気舎へ出て、そこで、歩行療法や作業療法を受け、病状の悪い者や手術直後の者は、個室へ出た。従つて大部屋のメンバーにも時々交替があり、私はサオトリウムにいた間に十人以上の人達と同室した。それらは皆、偶然が人生途上に齎した仮初の友人達と言うことが出来る。昼は昼の不安を共にし、夜は夜の恐怖を共にするこれら六人の患者達に、深い友情が流れていなかった筈はない。これをしも仮初と呼ぶならば、何処に仮初でない友情があるう。しかし、一人は一人だけの孤独を持ち、誰しもが鎖された壁のこちら側に屈み込んで、己の孤独の重味を量っていたのだ。そして一人一人は異つた年齢、異つた人生体験、異つた病状によつて独立し、相互を結ぶ友情と友情との楔目に、嫉妬や羨望や憎悪など、何よりもエゴイズムの秘められた感情を、隠し持っていなかったと誰が言えよう。

一般にサオトリウムの患者達にとつて、彼等を襲つた不幸は常に電撃的に来た。それは彼等の人生の道程を変えた。彼等が健康を自負していた時に、病氣は疾風のように彼等の帽子を飛ばしてしまった。今や、転がって行く帽子を追いかけて行く努力の中に、生きることの本質は次第に見喪われた。生きるという言葉が、これほどの実感をもつて眩かれる場所は他にないだろうが、

生きることとはその実、喀痰検査や、レントゲン撮影や、外科診断や、血沈の測定や、——すべて彼の病状の進行に関する不安の中に、凝縮した。患者は、一人ずつ自分の診療簿を持つように、彼の病状が彼自身に与えた精神の傷痕、彼に固有の孤独を持った。どのように病状がよくなったと医師に言われても、それで彼の不安がまったくなくなるわけではない。絶対に治癒した、と断言し得る場合は医学的に殆どない。唯、誰々と較べて良いとか悪いとかいう、相対的な自己満足があるばかりだ。そしてたとえ肉体が恢復したとしても、ひと度受けた精神の傷痕は、終生、癒されることなく残るだろう。この傷痕の自覚が、常に、私等の孤独に鞭を当てた。

汐見茂思が私の心を捕えたのは、何よりも、こうした傷痕を軽々しく表に洩らすことのなかった、その精神の剛毅に、私が打たれたからに他ならない。私は彼とベッドを並べて寝ていたが、嘗て一度も、病状が悪くなつたからと言って彼が心を動かすのを見たことはない。月に一回ずつ、血沈の測定と喀痰検査とが行われる。血沈は朝食前に済んで、九時から十時になると結果が分つた。すると部屋の誰かが医者（おかし）の眼を偷んで看護室へもぐり込み、六人分の血沈値を書き写して来るのだ。私達の中で、いつでも血沈がよかつたのは、良ちゃんと呼ばれていた大学生ひとりだった。あとの五人はその時々によくなつたり悪くなつたりした。喀痰検査の方は、結果が数日後に分つた。私達はそれが分るまで、どうも駄目そうだと噂して、いつこうに落著かなかつた。検査の結果にはガフキイ一号から十号までの等級があり、無菌の場合はマイナスと記入された。殆どいつもマイナスだったのは良ちゃん一人で、機械屋の角さんとか汐見とかは、時々五号や六号を出していた。私なんかはマイナスの時には躍り上って悦び、一号でも出ると、蒲団を

かぶって寝てしまったものだ。しかし汐見はどんなに悪くても、そうかいと言っただけで、格別の表情を示さなかった。

「君はよくそんなに平気でいられるね、」と私は汐見に言った。

「僕の精神が生きている限りは、」と彼は答えた。「僕という人格は僕のものだよ。」

「大きく出たね。しかしその君の精神とやらは、肉体の**混**びることに何の痛手も感じないのかい？」

「肉体は混びるさ、そんなことは分っている。分っているからこそ、僕は僕の精神を大事にしたのだ。君だってそうだろう。」

「しかし君、肉体が少しずつ参って行くのを見詰めるのは、耐えられないじゃないか。肉体が死にしまったら精神もへったくれもないんだから。」

「それを見詰めるのが生きていることだ、」と汐見は毅然として言った。

「そう理窟通りには行かないよ。」私はつい弱音を吐いた。

「君は感受性が強いからね、詩人というのはそういうものだろう。僕なんか、物を見てそれで生きていくだけだ。」

私はなるほど若年の頃から詩を書いてはいたが、作品以外で詩人扱いをされるのは御免だった。だから、厭な顔をして黙り込んだ。汐見は枕の下に隠した煙草の箱を取り出すと、一本を抜いて火を点けた。咳をし、それからまた深く煙を吸い込んだ。

「僕も昔はそうだったよ、」と彼は言った。「しかし僕は僕の感受性を殺してしまった。感受性、